

# 日本文化での「ムシ」という エスノカテゴリー 民族範疇：定義と表現\*

ローラン エリック  
(Erick LAURENT)

## 序 文

1. 方法論
2. 定義
3. 虫偏の漢字の動物学的な意味
4. 現地調査（フィールドワーク）
5. 結 論

## 序 文

日本文化についての外国からの学術上の研究は、決まったテーマ（宗教、都市計画、経済、芸術、ポスト・モダニズム、等）を中心とする傾向が強いと思われる。更に、現在日本の社会は自由主義的経済やインフラストラクチュア、ファッション、政治の制度などの影響で西洋的な外観を持っている。出現してくることは尊敬すべき、それとともに警戒を要するべき国のイメージである。しかしそのイメージを超えて、そのイメージの後ろに、日本文化・生活の基盤を確立する非西洋の文化的規範は存在している。

---

\*) フィールドで大変に手伝っていただいた、保科正明氏とその家族（長谷村）に、そして山下真玄氏とその家族や友達（江川）に感謝する。この小論文の準備を手伝っていただいた、私の友人の出口晴治氏、石井励一郎氏、今井千賀氏に、そして岐阜経済大学の鈴木忠士先生に感謝する。

本論文では、日本文化における、一つの民族的な動物カテゴリーの編成や重要性を見、そしてそのイメージを描写したい<sup>1)</sup>。また、一般に日本についての研究に新しい観点としての貢献をなしたいと考える。

民族動物学の最も基本的な規則の一つは、エミクな規準を利用すること、つまり「一つの文化の行動的な体系をその文化の規準を通じて描写する」(Sturtevant, 1964; 102頁)ということである。異文化を取り扱う時には、文化人類学者でも一つの民族とその周りにある自然(特に動物)との関わり的重要性をしばしば軽視するか、忘れるといった傾向がある。日本もまたその例外ではないと思える。

日本文化の中で、(昆虫と違って)虫は重要な要素である。平安時代の虫合わせ、虫選み、現在の夏休み中の虫の収集、昆虫食性などはその例である。更に夏の蛭狩り、秋の虫聞き等のような例は日本の特徴であると思われる。従って、虫はエスノカテゴリー(民族範疇)ではないかと考えられる。要するに、特定の文化(あるいはその文化の特別な部分)としか関連していないカテゴリーであるということであり、しかもあるもの(ある動物)がそのカテゴリーに属するための規準も、その特定の文化としか関連していないのである。

## 1. 方法論

「ムシ」というカテゴリーを定義するために、以下のような三タイプの調査を実施した。

(1) 虫の定義の範囲を理解するため、そしてムシという言葉と関連している合成語や表現、単語を見つけるため、辞典や百科事典<sup>2)</sup>での調査。

(2) 二つの辞典<sup>3)</sup>を通じての、虫偏の漢字の意味論的な分析。すなわち、各々の文字の科学的な意味、そしてその字から構成されたグループの動物的な構成内容の分析。

(3) 二度にわたる、各6カ月間（5月～10月）の現地調査。第一回のフィールドは1989年の伊那谷の山村、長谷村の養蚕家であり、第二回のフィールドは1991年の和歌山県川辺町の丘の間にある江川の寺である。九つの部落をもつ面積320 km<sup>2</sup>の長谷村は、その人口2560人の大部分が農林業を営んでおり、主に米、果物（葡萄、梨、りんご）、桑を栽培している。面積76 km<sup>2</sup>の川辺町では、人口6900人の67%が隣接する御坊市で働いている。江川で働いている人々の大部分は、米や蜜柑の栽培を行っている。

現地調査から得られたデータから、日本の農村の日常生活の中における虫の位置や重要性の一般的概観を描くことができる。虫とは何か、そして虫のイメージをより深く理解するため、江川ではより形式的なアンケートを行った。本論文で分析されたデータ（4.2.）はその一部である。

## 2. 定 義

昆虫より虫の方が広い概念であることに意義を唱える日本人は殆どいないであろう。しかしながら、その民族的（つまり非科学的）なグループを具体的に定義しようと思えば、問題が出てくる。

まず、古代中国における、ムシを表現するための文字を調べる必要がある。周時代では、全ての動物を意味する二つの文字が存在した：「虫」と「蟲」。早ければ後漢時代から、徐々にそれらは変遷してきた。例えば、中国語での最初の語源学辞典だと考えられている「説文解字」（西暦100年頃）では、この二文字は異なる意味を持っていた。「虫」は、まず細くて余り長くなく、そして大きな頭を持つ蛇<sup>4)</sup>を意味し、その次に形態や運動方法によって定義される動物の例があげられている：這うか飛ぶ（コウモリ）、毛があるもの（テナガザル、オナガザル）、ないもの、等々。「蟲」は足の無い動物を意味していた。

6世紀に日本へ輸入された時にも、この二文字は別の意味を持っていた。

文字の簡略化以後、それらは統一されて、現在では殆ど「虫」しか使われていない。

辞典や百科事典によると、「虫」の定義は四つの意味的な範囲に分けられると考えられる。

(1) 動物的な意味。全ての辞典は「本草学」から引用し、「虫」の意味をあげている。「本草学」による広義では、虫は「人類、獸類、鳥類、魚介類以外の小動物の総称」であり、つまりいわゆる「残りカテゴリー」である。しかしながら、すぐ後に「昆虫など」を載せているから、「残りカテゴリー」だけではないということが分かるであろう。虫の狭義は、一方、日本由来<sup>5)</sup>だと思われる「秋鳴く虫」(コオロギ、キリギリス等)、他方、<sup>さんし</sup>三戸<sup>6)</sup>という道教的な概念から由来した「回虫」ということである。

(2) 二番目の意味範囲では、虫は疳、疳の虫などのような病気、または腹と関係のある色々な病気などに関連していて、従って「心」や「考え」などの意味もある。

(3) 三番目の意味範囲では、虫は一般に「潜在意識」、特に潜在している心霊、状態、あるいはまた隠れた感情等と関連している。

虫という言葉を含む表現の多くには、主にこの(2)、(3)の意味での虫が見られる。「虫が痛い」(腹が痛い)、「虫が静まる」(落ち着く)、「虫が好かない」、「虫の居どころが悪い」等がその例である。

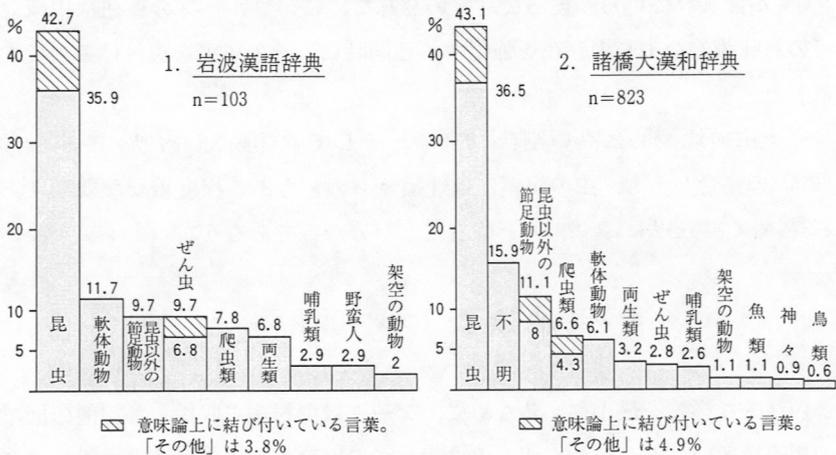
(4) 四番目の意味は、前出の意味範囲より新しく、意味論的に不均質である。「虫」は、特別なことに熱心な人を(例えば「本の虫」)、あるいはまたその性質に目立った傾向を持っている人(例えば「泣き虫」「弱虫」)を誹謗するために利用される言葉である。

### 3. 虫偏の漢字の動物学的な意味

#### 3.1. 方法論

全ての、虫偏を持つ漢字グループの意味論的な分析では、各文字が具体的にどのような動物を示しているか、そしてそのグループ全体に含まれる動物の分類が取り扱われている。要するに動物的な構成内容が分析されている（図1）。しかし、その人工的なグループが、日本文化の中で存在している「虫カテゴリー」とは異なるということは忘れてはならない。更に、このデータを現地調査で収集されたデータと同じ理論的レベルによって判断してはいけない。これらは、同じ程度に正しく考えなければならないにもかかわらず、別の現実性のレベルに属していると考えられる。

図1 虫偏の漢字の動物学的な意味



### 3.2. 結果と結論

図1を見ると目立っているのは、この二つの図（岩波漢語辞典も諸橋大漢和辞典も）の一般パターンの相似ということである。従って、歴史的に見れば虫というのは意味論的に均質の概念であると考えられるのであろう。それにもかかわらず、少数の相違も見られる。例えば、諸橋大漢和辞典の場合では、「不明」というグループの存在ということである。「不明」というグループは、諸橋氏が動物的な意味を明確化できなかった比較的古い漢字を含めている。

図1の両グラフでは、虫偏の漢字のグループは「昆虫」がはっきりと中心になり、「昆虫」というグループの割合（42.7%, 43.1%）は比較的高く思える。

次に、「昆虫以外の節足動物」と「軟体動物」<sup>7)</sup>がある。「昆虫以外の節足動物」の内、普段は昆虫と区別をしない動物（例えばクモ、ムカデ、ヤスデ、カニ等）が含まれている。従って、その意味で、このグループの存在は虫概念での意味論的な中心の存在を強化すると同時に、その事実を裏付けるのである。

ゼン虫の比較的に高い割合（約6%）、そして軟体動物（約9%）や爬虫類（7%）の割合からも、虫の定義には「這うもの」もある程度重要な要素である（少なくとも過去においては）ということが分かるであろう。

### 4. 現地調査（フィールドワーク）

西洋的な影響を最小にするために、データは農村から収集した。他の面での相違は多いにもかかわらず、虫に対しての態度や虫カテゴリーに対しての考え方では、現地調査の二つの村の人々の間に殆ど差異は認められなかった。

私は、村での日常生活（蚕に桑をやること、田んぼの世話すること等）に参加しながら、カテゴリーとしての虫についての全ての情報を収集した（要するに参与観察）。そして、虫カテゴリーを理解するために、そのデータを整理し分析を行った。形式的なアンケートのデータよりも、民族カテゴリーについての見方、考え方を理解するためにより新しく生き生きとした観点を与える点で、私はそのデータを、大変重要な要素と見なしている。要するに、そのデータや結果のユニーク性は収集の仕方にある。

#### 4.1. 参 与 観 察

##### A. 「虫」対「昆虫」

昆虫と違って、「虫」は民族のカテゴリーでありながら、虫そのものも、虫についての話や表現も多いので、日常生活では大事なものであると言えるのであろう。現地調査の結果によって、虫の概念に対しては、年齢によっても性によっても人々をはっきりと分けることができる。

年齢に関しては、50～60歳の間に虫を知覚する能力の境界が存在した。60歳以上の人々は、虫に対して、より広い見識を持って、虫とともにクモ、カエル、ヘビまで様々な動物を分類する傾向が強い。それ以下の若い人々は、虫を昆虫と近いカテゴリーと見なして、極端に一つのグループしか考えられないのである。勿論その理由の一つは、（特に学校での）教育を通じての科学的、西洋の影響が強いという点にある。例えば、17歳男子の高校生が私に「もう虫とは言わない、現在では昆虫と言うよ」と言ってしまったが、彼にとっては「虫」と「昆虫」の内容は全く同じで、ただ名称が変わったのである。

性では、虫ははっきりと男性の世界に属している。例えば、女性よりも男性の方が虫の名をよく知っているし、蚕以外では虫を収集する、狩る、飼育するのは、殆ど男性である<sup>8)</sup>。フィールドで、ある女性が「女だから、虫の

ことよく分からない。おじいさんに聞いて」と言いながら私の虫についての質問に答えるのを断わったこともあった。極端に言えば、幼い頃から男は外で虫と遊ぶことが奨励されていて、女は家の中で虫が汚く嫌なものであると教えられている。現在でも、虫の嫌いな女の子を「カワイイモノ」と見なす傾向は強いと思われる。最近、(特に学校での)教育のおかげで、ゆっくりと変化し始めたが、日本ではこのような考え方はまだ強いと思われる。私は20歳ぐらいの若い女性が毛虫とか蝶々の前でもパニックを起こすのを何度も見た。

以上のように、年齢と性というパラメーターは虫に対しての「知識・興味」についての尺度として結び合わされている。従って、四つのグループが考えられる。それらは、虫と遊びながらそれが昆虫と殆ど同じものとして見ている若い男性；虫に余り興味がなくそれが昆虫と殆ど同じものとして見ている若い女性；虫の伝統的知識や広い知覚能力を持っている高齢の男性；虫に余り興味も知識もない高齢の女性ということである。

## B. 「虫性」の程度

現地調査での観察の結果によって、日本人が虫カテゴリーの中に色々なレベルを考えるということが明らかになった。この際に、色々な「虫性」の程度が存在すると言えるのであろう。この事実を明瞭に証明するのは非常に難しいことである。直接に質問がなされた時に、しばしば答えは得られなかったのである。調査方法としては、比較される際に、ある動物が他の動物よりもムシであるという表現が出てきた時に、注意するという方法しかないのである。以下にこれについての四つの例をあげる。

(1) 直接に聞かれた場合では、殆どの日本人は「蚕が虫である」と判断するのであろう。しかし、毛虫やイモムシ、ムカデ、ゴキブリについて話す時に、「蚕って、虫なの？」と素直に聞くと、答えは「そうですねけど…」、「そう言われたら、ま…虫だろうが…」などのようなものとなる。

蚕でも、同じような現象が存在するのである。フィールドで養蚕家から言われたのは「蚕は虫の仲間」ということである。あるいはまた、蚕が他の虫より「文化化した」<sup>9)</sup>虫であることを私に示すために、「普通の虫はいつも逃げようとする。どこでも行っちゃう。蚕はただここに残る。」

この二つの例は特別であるかもしれない。なぜなら、日本文化では虫と蚕は大変「文化化した」虫であると考えられるからである。例えば、触れたり、飼育されたり、観察されたりして、そして文学や昔話、諺、表現などに出てきて、いつも比較的良いイメージを持っているからである。

(2) 飼育の蚕と野生蚕は別の名を持っている：前者は家蚕<sup>カサン</sup>、後者は野蚕<sup>ヤサン</sup>、あるいはヤマコ、ヤママユ、テンサン、クワコ（これらは自然、山、野生に属している命名）である。どちらの蚕とも「虫」として考えられているが、野蚕の方が「本当の意味での虫」として考えられている。規準は粗野、丈夫さである。それに対して文化、洗練という要素が存在している。野蚕の種類はより大きくて、黒くて、強く、すなわち日本人にとってより「野生」、より「変」ということである。言われたのは「野蚕の方が荒っぽい。恐い、よ。黒いから恐いよ」。緑色があった野蚕をテレビで見て非常に嫌な気持ちを持っていた40歳ぐらいのサラリーマンに私は出会ったことがある。「なんでそんなに嫌ですか」と聞くと、彼は「白くないから」と当然のように答えた。伝統的に日本では自然の中に、白という色は良いイメージを持っている。このことは、暗い色、特に黒と対照的に、純粹という意味を持っている。

(3) 昆虫の成虫とは反対に、時には幼虫は「ムシ」という名を持っている。一つのふさわしい例は蚕であり、蚕の幼虫は「ムシ」と呼ばれて、成虫は「ガ」と呼ばれている傾向が顕著である。もう一つの例は、ミノムシ対ミノガであり、あるいはまたカブトムシの幼虫は時にはただの「ムシ」と呼ばれている。最後に、蛍の幼虫は時には「ウジボタル」と呼ばれている（南、1961）。

同じように、両生動物の内に、幼虫だけは虫カテゴリーに属し、それに対

して成虫はそうではない場合もある。例えば、蛙とひき蛙。形のせいであろうか、オタマジャクシは虫であるが蛙は虫ではないということである。

(4) 最後の例は次の会話から取りたい。ある夏の夜、60歳の人と一緒に田んぼを歩いていた時、突然藪から虫の声が聞こえた：

(彼) — キリギリスだ。

(私) — そうか、蟬かと思った。

(彼) — 違う、違う。虫だ。

(私) — ？

(彼) — 虫、キリギリス……

(私) — そしたら、蟬は虫ではない？

(彼) — ？……

勿論こういう直接的な質問には彼は答えられなかった。答えたら、矛盾だと受けとられるのではないかと思ったのであろう。いずれにせよこの比較の際、蟬に対しては、キリギリス（一般に、秋に鳴く虫）は虫として考えられた。

しばしば行われる「虫」を使つての命名の仕方は、多数のあるもの、限らないもの、特定の名のないものに関連していて、よく知られているもの、特定の名を持っているものとは対照的である。私にとって、これは虫カテゴリーの最も大事な特徴の一つである。

これらの例から分かるのは、全ての虫の内に、虫一般の形や行動、それと接する者の内に引き起こされた感情などによって様々なレベルが存在しているという現象である。

ある動物が、言葉や概念の使用されたコンテクストによつても、しかも比較された動物の種類によつても、「虫」であるかそうでないかを決めるのである。

### C. 運動のタイプ

あるものが虫カテゴリーに属するかどうかを決定する時に、運動のタイプは重要な規準になる。基本的に、虫はハウモノである。ある程度、名の語尾で「ムシ」がついた虫と、そうでない虫との区別ができそうである。つまり、語尾に「ムシ」がついた名は「這う<sup>10)</sup>虫」を示している傾向がある。そうではない名は「飛ぶ虫」を示している傾向がある。例えば、{ケムシ、イモムシ、カブトムシ、キクイムシ} 対 {ハエ、トンボ、チョウチョウなど} である。こういう傾向は絶対的なルールではないが、日本語での強い傾向であると言えるであろう。

更にインフォーマント達に、フィールドで死んだ虫を見せて名前を聞いた際に、その虫が生きていた時の、這うか飛ぶか泳ぐかという情報を与えないと、答えにくくなるようである。

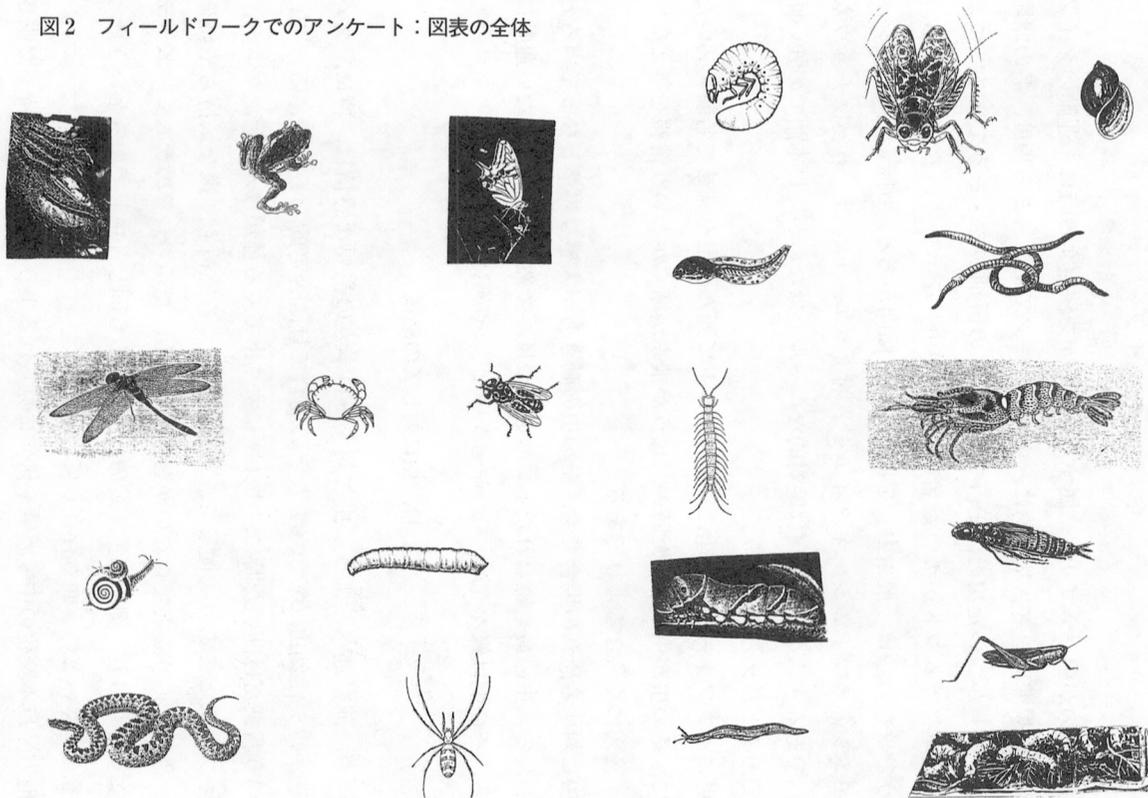
虫に対する恐れの場合でも、その虫の動き方が大事な規準となっていると思われる。虫の最も嫌われたトコロの一つは、突然で予測のつかない運動にある。その例は蝶々（クロアゲハチョウ<sup>11)</sup>など）や蛾に見られる。

### D. 虫に対しての感情

一方、前に述べたように虫に対する日本人の主要な感情は、特に、ケムシ<sup>12)</sup>、ウジ、幼虫（蝶々でも）などの場合では、否定的なものである。「虫」という言葉だけ聞いた時に、考えずにすぐ出てくる種類はムカデ、ケムシ、ゴキブリなどであり、従って、最初に出てくる感情も、嫌な気持ちや嫌悪感、恐れということではないかと推測される。だから、そのケムシ、ムカデのようなものも、例えば蛍、蟬のようなものも同じ「虫」であるということが考えにくいという面も存在している。

他方、日本文化の中で、歌や俳句に見られるように、短い命を持った生き物に対する「ものの哀れ」、「愛しさ」<sup>13)</sup>という感情も深い所で存在してい

図2 フィールドワークでのアンケート：図表の全体



る。フィールドでのインタビューから、虫と関連する職業を持っている人々は皆、「ジブンの虫」は大好きであったのに、「ベツの虫」を嫌う人が大部分であることが分かった。養蚕家や、養蜂家、蛭を飼育した人々、蜂の子を捕った人々もその例である。彼等はジブンの虫とそれ以外の殆ど全ての虫とに対する態度・感情が全く逆であった。

## 4.2. アンケート

### A. 方法論

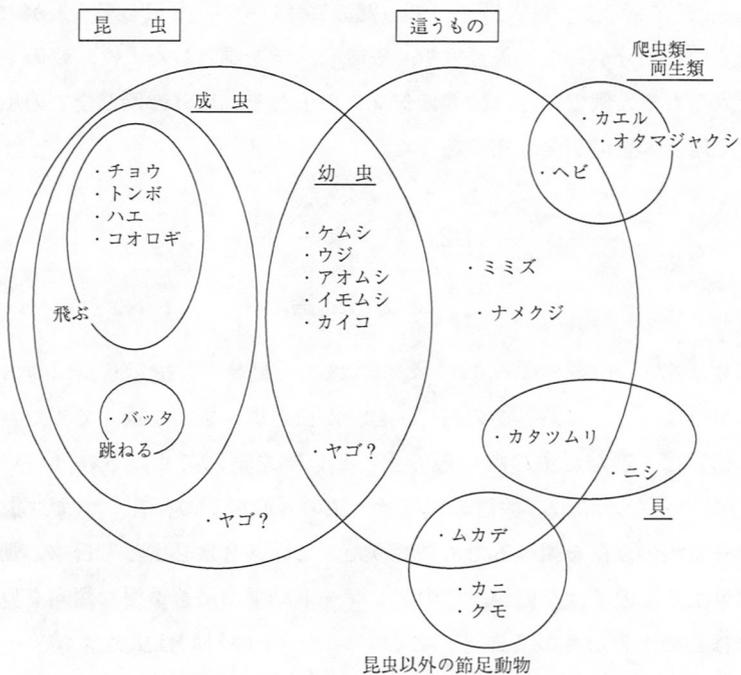
図2は67人（平均年齢55.0歳、女性58.2%）に見せた。提示した二つの質問は、第一は「ここにある物の内で、自分が虫と思うものを選んでください」で、第二は「選んだ虫の中で最も虫らしい物を選んでください（いくつでも）」であった。この二番目の質問は、虫の「原形」の存在、つまり虫カテゴリーの核の存在を調べるために問うた。この図2は必ずしも日本の動物相を代表するものではないが、このアンケート結果の最も重要な傾向を見るためには必要十分なものである。このアンケートの目的は虫カテゴリーの概観・内容を検討すること、そしてその核（「原形」）の存在を調べることである。

### B. 結果と解釈

#### a) 選択のタイポロジー

図3はカテゴリーの可能性としての基本的な組み合わせを示している。五つのグループが出てくる。この<sup>タイポロジー</sup>類型化は単なる一般的な傾向である。そのグループでは、いつも一、二の要素が例外になるわけである<sup>14)</sup>。次の類型は組の数の大きい順に従ってあげられている。七つの答えの場合では、一つのグループに入るのは無理だったし、それらだけで一つのグループを作るのも無理であった。

図3 答えのタイポロジー



- |                         |   |      |    |
|-------------------------|---|------|----|
| (1) 昆虫+這うもの             | : | 出現頻度 | 18 |
| (2) 昆虫 <sup>15)</sup>   | : | 〃    | 18 |
| (3) 這うもの <sup>16)</sup> | : | 〃    | 14 |
| (4) 昆虫の幼虫               | : | 〃    | 7  |
| (5) 昆虫の成虫               | : | 〃    | 3  |

(1) 昆虫+這うもの

この答えの組は年齢の平均ぐらい (57.9歳) で、女性の77.8%である。18人の全員ともが「蛇」を除いた。17人は「昆虫+這うもの」とともに、クモも入れた。ヘビは這うものなのに、科学的西洋的な影響のせいであろう

か、もう虫とは見なされていないし、クモは普段、昆虫と一緒に考えられている。核では、この組の答えを出した人々の、昆虫の幼虫（ケムシ、アオムシ、カイコ）を選ぶ傾向は明らかであった。

出てきた五つのグループの内、これは最も包括的である。虫に対する伝統的な理解や判断の仕方（ただの核）とともに、近代的な意味（厳密な意味においての「昆虫」）も含めていると考えられる。最も虫らしい物を選ぶことを要請された時には、伝統を見るのであるが、色々な動物の内から虫であるものを選ぶことを要請された時には、這うものを忘れることはあるけれども、飛ぶ虫は殆どの場合忘れないのである。

## (2) 昆 虫

この答えのグループは比較的若く（年齢の平均が45.3歳）、女性のやや多い（66.7%）人々からなる。「虫」をただの「昆虫」として見るのは、西洋的科学的な由来があると言えるのであろう。18人の内、12人は「昆虫」と一緒に、クモとムカデを入れた。それらは伝統的にいつも昆虫と見なされているわけであろう。

核では、この答えのグループに属している人々は比較的に特定な考えがある。要するに、バッタと蚕が最も多く選ばれたのは、文化的に大事な虫<sup>17)</sup>だからと言えるであろうし、その次に選ばれたのはムカデとクモであるが、それらの「虫カテゴリー」を定義するための重要性を示しているであろう。

## (3) 這うもの

この答えのグループは年齢が比較的に高い<sup>18)</sup>（61.1歳<sup>19)</sup>）。14人の内、12人は「這うもの」であるにもかかわらず「虫カテゴリー」からヘビを除き、10人は「這うもの」とともに、飛ぶ虫の一つも入れた。そのうち九つのケースは、バッタであった。これも日本文化の中でのバッタの重要性のもう一つの証明であろう。だから、虫はただの「這うもの」としてしか考えない場合

でも、虫からバッタを除くのは難しいであろう<sup>20)</sup>。

核では、ウジ (出現頻度 9)、ケムシ、アオムシ (両方、出現頻度 5) を中心としていて、すなわち鱗翅目<sup>21)</sup>や双翅目<sup>22)</sup>の幼虫ということである。このグループは、虫に対する民間の、伝統的なイメージであると考えられる。

#### (4) 昆虫の幼虫

この答えのグループが出現頻度 7 しかないので、傾向を把握したり解釈したりするのは難しくなる。このアンケートの最も年取った人々 (年齢平均: 62.4 歳) がいて、しかも殆ど男性 (6 人) である。答えのパターンは前(3)のと近いのである。ただし、本組では虫カテゴリーは意味範囲が狭くて、前の答

名	出 現	(%)
幼 虫		
ウ ジ	61	91.0 <sup>24)</sup>
イモムシ	60	89.6
	ムカデ	59 88.1
ケムシ	58	86.6
アオムシ	57	85.1
	バッタ	56 83.6
カイコ	54	80.6
-----		
	ハ エ	45 67.2
ヤ ゴ	44	65.7
	コオロギ	43 64.2
	ク モ	43 64.2
	チョウ	40 59.7
	トンボ	38 56.7
	カタツムリ	32 47.8
	ナメクジ	29 43.3
	ミミズ	28 41.8
-----		
	オタマジャクシ	9 13.4
	ヘ ビ	5 7.5
	カエル	4 6.0
	ニ シ	1 1.5
	カ ニ	1 1.5

えの組の核と同じグループになる。

次の答えのグループ（昆虫の成虫）は出現頻度が3しかないので解釈できない。

#### b) 出現の頻度

左表は個人的な、虫の選択頻度の全体リストである。

水平的に、三つのグループに分類することが可能となる。

まず、80%以上の人々から虫として選ばれたものである。見られるように、このグループには、ヤゴ<sup>25)</sup>以外全ての「昆虫の幼虫」が含まれている。これらの幼虫に加えて、このグループにはムカデもバッタ<sup>26)</sup>も見られる。リストの最初の6匹の虫が嫌な物とか、害虫であることは面白くて、虫のイメージではこれは大事な要素であると考えられるのであろう。

その次のグループは二つの部分があり、それらは「成虫」（55~68%）と（昆虫以外の）「這うもの」（40~50%）である<sup>27)</sup>。そのグループに属しているものを虫として選んだ人が半分ぐらいしかいないので、そのものは虫でありながら同意されていないと言える。例えば、トンボかハエに対して言われたのは、「昆虫であっても、本当の虫ではない」ということもある。

三番目のグループは、虫として10%以下の率で選ばれたものであり、それほど虫とは見なされていないと言える。ヘビ、カエル、ニシ、カニが虫ではないということは、辞書の定義ともフィールドで収集されたデータとも同意しているけれども、オタマジャクシは問題になる。現地調査の結果によれば、普段オタマジャクシは虫として考えられているが、この形式のアンケートでは13.4%の人々しかそう思わないのである。図2ではカエルとともにあったので少し矛盾を感じさせたか、方法としてのこういう形式のアンケートが自然の状態ではないので素直な答えをもらえなかったのか、どちらかである。

垂直的に見れば、自然の三つの部分で分けることができ、分かりやすくするためにそれらは、ずれた形で表現された。

まず、幼虫は、80%以上の人々から虫として選ばれて、統一的な群れとして現われている（例外は蚕とヤゴである。注17、25を参照）。

その次、成虫は、60~65%で、やや統一の群れになる（例外はバッタである。注17を参照）。

最後に、（昆虫以外の）「這うもの」というグループは、より不均質である。でも、形態学的に昆虫の近くに位置するムカデとクモ、そして大き過ぎるヘビ、あるいはまた、はっきりと貝であるニシ以外では、「這うもの」は40~45%の人々から虫として選ばれて、比較的統一されている。

基本的に、その三つのグループでの配置は、虫カテゴリーの中のいくつかの理論的なレベルの存在、すなわち「虫性」の程度の存在ということを確認させると言えるのであろう。

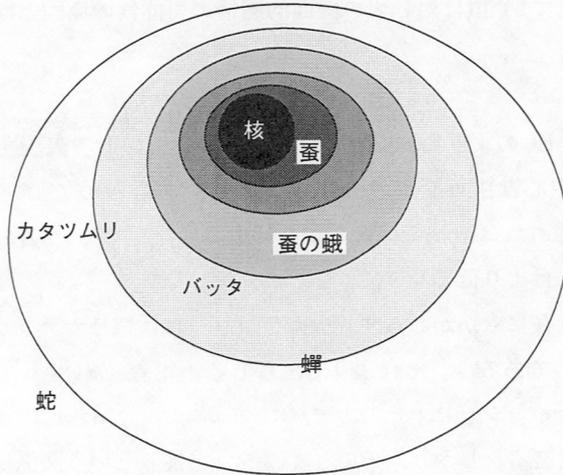
### c) 虫カテゴリーの核

核の選択についての結果（図4下）では、虫カテゴリーの核は昆虫の幼虫のようなもの、つまり蛆形の、足のない、未分化の、灰色っぽいものと近いのである。昆虫の全ての（羽を持つ）成虫は幼虫より選択の率が低いのである。しかしながら、図4（下）に見られるように、この点では男女区別が見出されて、男性の方が虫カテゴリーの核としての成虫を多く選ぶわけである。

## 5. 結 論

a) 虫カテゴリーは「依存カテゴリー」<sup>28)</sup>あるいは「条件カテゴリー」<sup>29)</sup>であり、すなわちコンテキスト（外の状況）によって変化して、別の形（内

図4 虫カテゴリーとその核の表現



女性		核	男性	
33.3%		ケムシ (37.3%)		42.9%
43.6		カイコ (35.8)	25.0	
33.3		ウジ (34.3)		35.7
38.5		アオムシ (31.3)	21.4	
30.8		ムカデ (31.3)		32.1
25.6		バッタ (26.9)		28.6

容) で表現しているものである。一方これに対しては、外の範囲には変化しない「ネコ」や「イヌ」のような「一定のカテゴリー」が存在している。別の動物との比較によっても、あるいはまた取り扱っている文化の部分（文学や宗教、民族命名、美術など）によっても、ネコやイヌの「定義」は変化しないわけである。猫が犬っぽく見えても、常に犬っぽいネコの範疇にとどまっている。それと異なり、虫に関しては、セミそのものも虫ではあるが、それはギリギリスより「虫ではない」、あるいはまたオタマジャクシは虫でありながら、カエルは虫ではないということである。その上、年齢や性によって虫の定義は違ってくるとい現象もある。

虫カテゴリーの「依存性」、「条件性」というのは、(個別な動物としてもカテゴリー全体としても) 虫に対しての両面的感情の可能性の原因となると言えるだろう。

b) 図4(上)のように、虫カテゴリーは同心円の形で表現することができる。その中心は虫カテゴリーの核である。あるもの(動物)は、その中心・核から離れれば離れるほど、より「虫ではなくなる」。言い換えれば、その「虫性」はより低くなる。

外の円の存在にもかかわらず、虫カテゴリーは「残りカテゴリー」であるとは言えないであろう。それよりも、むしろ不定義(新しいものを含めて)の動物が「虫とイッショに」(つまりソバに、チカクに)分類されたという現象が起こったと言える。しかし、その「イッショに性」という関係は決してただの認識的性質ではないのである。

c) 虫カテゴリーは「中心のあるカテゴリー」<sup>30)</sup>であり、その中心・核の特徴は次のようにある。すなわち、幼虫(双翅目、カブトムシなど)、足無し(あるいはムカデのようにその反対)、野生(「文化化された」の反対として)、灰色っぽい、やや大きく長い、這う、突然で予測のつかぬ運動をする、むしろ柔らかい(グニャグニャという擬態語と関連)、毛を持つ、などのようなものである。

最後に、日本文化の中では虫は日常生活から宗教まで、料理から文学まで、具体的な場にも、象徴的な場にも深く存在しているカテゴリーである。コオロギのような秋鳴く虫の声も、夏夜での蛍の出現なども自然的デキゴトでありながら、日本人には決して平凡なことではなくて、文化的に有標のデキゴトである。虫は、季節によっても虫の種類によっても、色々な感情を具体化するための資料の宝庫でもある。自然から文化へ……

〔注〕

- 1) 本論文は『日本文化の中の「虫』』という博士論文（1995年）の一部であり、1995年の「Definition and Cultural Representation of the Category *Mushi* in Japanese Culture」, 『*Society and Animals*』3(1). 61-77頁の改変版でもある。
- 2) 『広辞苑』（(1955年) 1986年）；『大言海』（(1932-37年) 1982年）；金田一、池田の『国語大辞典』（1980年）；『日本大辞典』（全6巻, 1986年）；岩波の『古語辞典』（1974年）；講談社の『*Encyclopedia of Japan*』（全9巻, 1983年）；平凡社大百科事典（全18巻, 1954-85年）。
- 3) 一つは岩波『漢語辞典』（1987年）であり、その約6000字の内、虫偏の漢字は103字がある。もう一つは諸橋の『大漢和辞典』（全13巻, (1955-60年) 1986年）であり、その約4万9000字の内、虫偏の漢字は823字がある。つまり、両方とも約1.7%である。
- 4) 現在の日本語での「ムシ」、つまり「蚊」という字を利用していた。
- 5) 例えば、8世紀からの虫聞き、虫合わせなど。
- 6) その説によって、人間の体の中で、三つの「存在」が住んでいる。それらは人間の行動、感情、考え方までを治めるという（窪, 1961）。
- 7) 「軟体動物」が高い割合を示すのは、カタツムリ（「デンデン虫」とも言う）や小さな水性軟体動物のような「虫らしき」動物も含まれているからである。更に、軟体動物は這うものであるから、虫と見なす場合も多いと思われる。
- 8) 現在の日本では、「お蚕様」を世話するのは、普段殆ど女性であり、男性が桑を取ったり、繭を運んだりしているのである。
- 9) つまり、彼女が言いたかったのは、他の虫より人間と近くなるということであろう。
- 10) 日本語での「這う」というのは、意味範囲が広いのである。例えば英語に比べたら、「creep」のも「crawl」のも意味している。つまり、「這う」というのは、足のない蛇と6本の足のあるカブトムシとの色々な動き方を示している言葉である。
- 11) 伊那谷では、これが「コウモリチョウ」と呼ばれて、のろくて、重くて、要するにコウモリのような飛び方をするのである。
- 12) 例えば、「ケムシのように嫌う」などのような表現。
- 13) 「いとおしむ」まで考えられる。
- 14) 組が作られたのは、理想的な組に近い状態でのまとめが出てきた時である。
- 15) 幼虫も成虫も含めて。
- 16) 昆虫の幼虫も含めて。

- 17) バッタは水田の害虫として昔から知られていたり、民間行事にも大事な「ジンプツ」であり、食べられたりしている。また蚕は今でも経済的な意味を持ったり、民間伝説・信仰に大きな役を演じたりしている。
- 18) 女性の割合は平均的である (57.1%)。
- 19) 50歳以下の人は、一人だけいる。
- 20) 前に述べたように、日本語での「這う」という概念は比較的に広いけれども、バッタというのは這うものの代表の動物として見るができないと思われる。
- 21) 蝶、蛾など。
- 22) ハエ、カなど。
- 23) つまり、昆虫以外の這うものである。
- 24) つまり、ウジは61人 (67人の91.0%) から選ばれて、全ての答えのうちに、61回出現している。
- 25) ヤゴは普段余り見られないし、日本文化では余り大きな役割をしていない虫である。
- 26) 前に述べたように、この二つの虫は日本では特別な文化的な意味を持っている。
- 27) 例外として、最初の部分の中でヤゴとクモが見られる。
- 28) 要するに、表現は外的状況に依存、変化しているということである。
- 29) 要するに、あるカテゴリーは、いくつかの外的条件によって決定的な形で表現するかしないかが決定されるのである。
- 30) 「残りカテゴリー」の反対の概念として考える場合。

〔参考文献〕

- Brown, Cecil H. 1979. "Folk Zoological Life-Forms: Their Universality and Growth". *American Anthropologist*, 81(4). 791-817.
- Carr, Mickael. 1983. "Why did *D'iông* change from 'Animal' to 'Bug'?". *Computational Analysis of Asian and African Languages*, 21. 7-13.
- 窪 徳忠 (1961), 『庚申信仰』日本学術振興会, 1149 頁。
- 南喜市郎 (1961) 1983, 『蚕の研究』サイエンティスト社, 321 頁。
- Sturtevant, W. C. 1964. "Studies in Ethnoscience". *American Anthropologist*, 66, 3(2). 94-131.
- 吉松久美子 (1984), 「日本人の動物に関する民族分類とその歴史変遷」, 『人類学』15(2). 179-240 頁。